

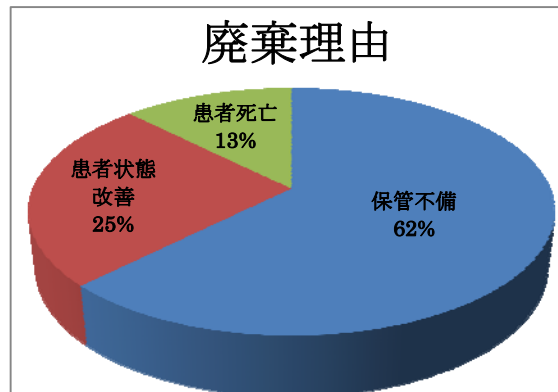
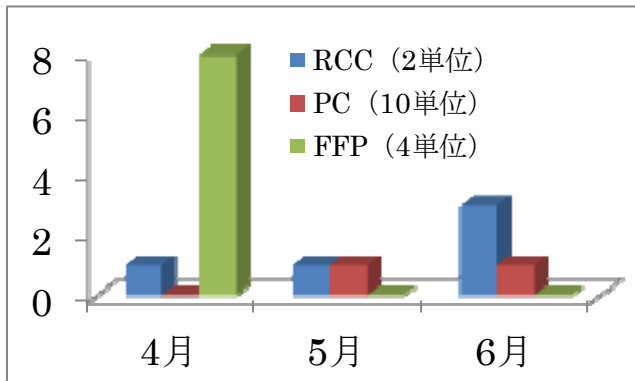
輸血部ニュース

14-vol.1 2014年7月14日
広島大学病院 輸血部 発行：藤井 輝久
編集：齊藤 誠司
輸血部内線：5582, 6227
PHS:2894, 2389

輸血製剤の廃棄削減に御協力下さい！

新年度に入って4月～6月の期間において輸血製剤の廃棄が8件（製剤の合計金額で約45万円）ありました。廃棄理由の多くが輸血製剤を使用しなかった際の保管不備と返却手順の確認不足が原因で起こっていました。患者状態の改善などによりオーダーした輸血製剤を使用しないと判断した場合には、輸血部にて転用手続きを行

いますので、手順に従って速やかに輸血部へご連絡いただきご返却下さい。（参照：輸血療法マニュアル2014年度版20-21P 8. 回収・転用・廃棄）輸血製剤の廃棄は医療資源の無駄遣いと言えますので、医療費削減のためにもぜひ皆様のご協力をお願い致します。



アルブミンの適正使用推進に関する講演を行いました

輸血に関する講習会の一貫で、2014年3月に「奈良県立医科大学輸血部教授 松本雅則先生」にお越し頂き、「**アルブミンの適正使用に関する講演**」をしていただきました。なぜアルブミンの使用削減が必要なのかについて、国内のアルブミン使用状況、アルブミン製剤の自給率の低さ、海外製品

の純度や安全性の問題、安定供給の問題をわかりやすく解説して頂きました。さらにアルブミンの使用削減で患者さんの予後は悪化しないかに関しても、様々な疾患でのデータをお示し頂きました。最後にアルブミンの使用削減のための奈良医大での取り組みについてお話いただき、**過剰使用**

例へのアンケート調査の実施や輸血部でのアルブミン製剤管理による削減効果についてお聞きすることができました。奈良医大での取り組みを参考に、今後は広島大学病

院でも積極的にアルブミン製剤の使用削減を進めていきたいと思っております。以下に松本先生のご許可をいただき、講演スライドを提示致します。

<p>アルブミンの使用削減で予後は悪化しないか？</p> <ol style="list-style-type: none"> 重症患者(循環血液量減少、熱傷、低アルブミン血症など)におけるアルブミンの使用は、予後を改善する可能性は低い。特に熱傷や頭部外傷では、予後を悪化させる可能性がある。 アルブミンの適正な使用としてコンセンサスが得られているのは、肝硬変(難治性腹水、肝腎症候群、特発性細菌性腹膜炎)、敗血症、血漿交換など現状では限られている。 現在、日本国内の使用状況から不適切な使用状況が主であると考えられるので、<u>使用削減で予後は悪化しない</u>のではないかと考えられる。 	<p>奈良県立医科大学附属病院での取り組み</p> <ol style="list-style-type: none"> 輸血療法委員会で使用量の多い診療科に警告。 病院運営協議会・医局長会で現状を説明。 平成18年6月12日より、アルブミン製剤に別紙アンケート用紙を添付。 アルブミンを25%から20%製剤へ変更(平成20年10月より) 輸血部でのアルブミン管理(発注時のcheck) 病棟配置薬の削減(不十分)
---	--

アルブミン製剤適正使用推進のためのアンケート調査へご協力下さい。

現在、本院のアルブミン使用量は、国内の大学病院における病床あたりの使用量と比較して極めて多い状況にあるため、診療報酬における輸血管理料Ⅰの適正使用加算が算定できない状況が続いています。加算の条件である「アルブミン製剤の使用量/赤血球比製剤の使用量の比率<2.0」(他大学病院の全国平均約 2.1, 本院では約 4)を満たすことができないためです。昨年度、長期間アルブミン製剤が投与されているケースを調査したところ、適正でない使用や明らかに過剰使用であると思われるケースも散見されました。そのため輸血に関する院内巡視の際にも重点課題として取り上げ、各診療科へ適正使用につい

て今一度お願い申し上げました。輸血療法委員会ではアルブミン製剤の適正使用をさらに推進していくため、今年度より長期間アルブミン製剤を使用しているケースに関して、診療担当医宛てにアンケート調査を依頼しております。しかしアンケート調査用紙の回答が得られない状況が続いております。アンケートを受け取られた担当医と診療科の病棟医長の方にはお手数ですが **2週間以内の輸血部への返送**をお願い申し上げます。

引き続き診療担当医の方々にはご負担をお掛け致しますが、何卒アルブミン製剤の適正使用にご協力頂きますよう宜しくお願い致します。



この記事に関するお問い合わせは
輸血部内線 5582, 6227 まで